

<小学校 生活科>

身近な人々や自然に進んでかかわる学習指導の工夫

—海たんけんを通して—

知念村立知念小学校教諭 當山園代

内容要約

海たんけんを通して、多様な体験や活動を単元構成で取り入れたり、学習過程において支援の工夫をすることで、身近な人々や自然に進んでかかわる児童の育成を目指して研究を進めてきた。

その結果、生き生きと活動する児童の姿が見られ、友達のよさや地域の人々のよさ、素晴らしさに気づく児童が増えてきた。

【キーワード】かかわり よさ 支援の工夫 気づき

目 次

I テーマ設定の理由.....	41
II 研究仮説.....	41
III 研究内容.....	42
1 身近な人々や自然に進んでかかわるとは.....	42
2 学習指導の工夫.....	43
IV 授業実践.....	45
1 単元名.....	45
2 単元設定の理由.....	45
3 活動の流れ.....	46
4 本時の活動.....	48
5 考察.....	48
V 研究全体の考察.....	49
VI 研究の成果と今後の課題.....	50

<小学校 生活科>

身近な人々や自然に進んでかかわる学習指導の工夫

—海たんけんを通して—

知念村立知念小学校教諭 當山園代

I テーマ設定の理由

平成10年、学習指導要領が改定された。生活科の教科目標も見直され、「具体的な体験や活動」「身近な社会や自然とのかかわりに関心をもつこと」を重視するとともに、新たに「人々」が付け加えられた。これまで人とのかかわりは大切にされてきたが、今日、人間関係の希薄化が大きな社会問題となつておらず、身近な人々とのかかわりが一層重視されている。

生活科は見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる等の具体的活動や体験を通して、児童が自ら学び、自ら生きる知恵を身につけることを目指しており、これまでの「教わる教育」から「学ぶ教育」への転換を重視している。

生活科では、児童を取り巻く生活圏が教材となる。そのため、教師は生活科での児童の学習の場が、学校、家庭、地域であることを理解し、素材がどこにあり、どのように教材化して活用できるか等、具体的に把握することが大切である。そして、その中で児童一人一人が豊かな体験や問題解決的な活動を広げていくことが「自立の基礎」を培う活動として重要になる。

これまでの授業実践を振り返ると地域の教材研究が十分でなかったため、適切な教材を適宜に提供することができなかつた。そのため、地域を取り扱う単元が先送りになつたり、児童の興味・関心が持続できないことがあつた。

また、本校の児童を取り巻く環境はほとんどの集落が海に面し、緑に囲まれた自然豊かな地域であるが、帰宅後はゲーム等、家の中で過ごすことが多く、直接自然や地域の人々にかかわったり、地域行事に参加したり、公共物や公共施設を利用することは少ないので現状である。

これまでの指導の反省や児童の実態から、主体的に身近な人々や自然にかかわる学習を展開するためには、児童の思いや願いをかなえる教材との出会いや支援の工夫、五感をフルに活用した体験学習の場の設定をすることが重要になる。

今回は「海たんけん」を通して、地域の人々や自然、文化とのかかわりの中で、自分を取り巻く地域に対して愛着を持たせたり、地域のよさや自分の生活とのかかわりに気づかせたい。また、互いに協力し合い、自分のよさ、友達のよさに気づかせ、人と接するマナーを身につけさせたい。

そこで、児童の興味・関心を喚起し、維持、継続できるような学習過程の工夫や支援の工夫をすることで、身近な人々や自然に進んでかかわる児童が育成できるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

児童の興味や関心のもてる地域素材「海たんけん」を取り上げ、児童の思いや願いをかなえる具体的な活動や体験を多く取り入れた単元構成や学習過程における支援の工夫をすれば、児童は身近な人々や自然に進んでかかわるであろう。

III 研究内容

1 身近な人々や自然に進んでかかわるとは

かかわるということは関係することであり、生活科において児童を身近な人々や自然に進んでかかわらせるようにするには以下のことが挙げられる。

(1) かかわることの意味

① 双方向性のあるやりとりへ

基本的に自分との双方向性をもったやりとりである。しかし、客観的に見ると、児童から対象への一方的な働きかけであるように見える。視点を変え、子どもの立場に立って、児童の行動・心情の変容などを基にして考えると、対象からも様々な働き返しがあることがわかる。つまり、かかわるという働きかけは、常に双方向性をもっているのである。

② こだわりと対象のかかわり合い

対象とよりよい関係を結ぶための手段であるとともに、目的でもある。かかわることを通して、自分を改めて見直すことでもあり、対象への働きかけに変容が見られる。その際、対象へのこだわりが、よりよいかかわりを活性化させるうえで、重要である。

③ くり返しと対象とのかかわり合い

対象にくり返し働きかけることで深まってくる。くり返すことは、対象からの働き返しがあってより活発になってくる。くり返し働きかける中で、対象へのこだわりも深まってくる。

(2) かかわり合いの諸段階

一口にかかわり合いと言ってもその場面は様々である。これをかかわりの程度あるいは、かかわり方の段階ごとに分ける。

気 づ く

児童がその対象の存在に初めて気づくこと、かかわりの第一歩である。例えば、探検学習で友達や教師の話を聞いたり、実際に見たり、触れたりする活動を通して、地域の人々や自然の存在に気づく。

理 解 す る

低学年の児童は対象と一緒にとなり、そこから対象の思いや願いを理解するようになる。例えば、探検活動において地域の人の思いがわかる。

学 ぶ

立場を変えて見ることで、今までの自分になかったより深い見方、考え方方が生まれる。例えば、探検終了後の表現活動において、地域の人になりきって発表をする児童は、地域の人の思いや願いがわかる。

共 生 の 意 識 を も つ

自分と対象がよりよくかかわることである。例えば、地域を探検する活動では、活動後、地域の人々や自然と自分とのよりよい関係やその場での適切な行動をどのようにとればいいのかわかる。

(3) 身近な人々や自然に進んでかかわる児童とは

自分から地域に働きかけ、地域のことが好きになり、充実した生活を送ることができる児童のことである。例えば、進んで地域の人と挨拶を交わしたり、地域の伝統行事に参加する等、自分と地域の人々や自然がどのようにかかわっているかに気づき、さらに、自分なりの切実な問題意識を持って調べたり、考えたり表現したりすることである。

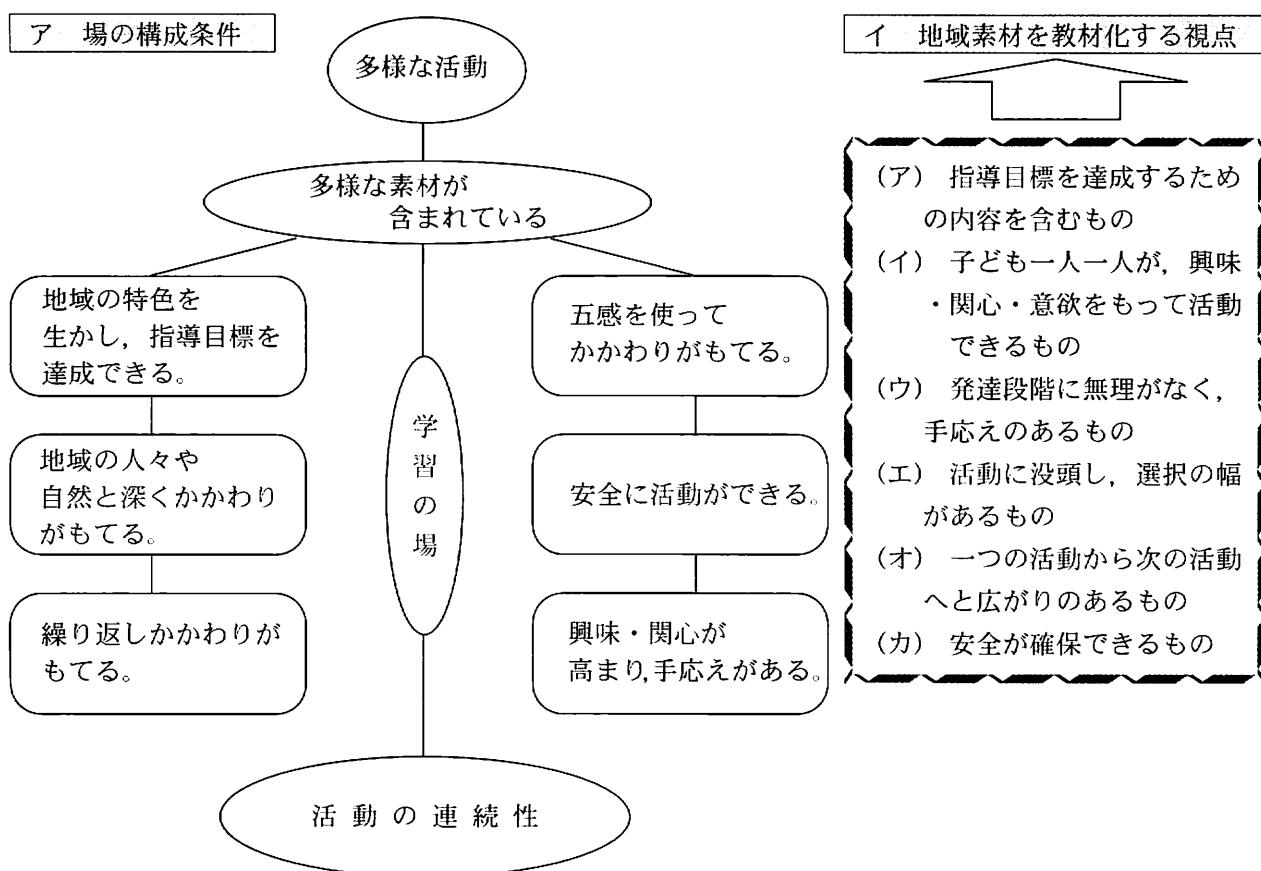
2 学習指導の工夫

(1) 地域素材の教材化

① 地域素材を教材化する視点

教材として最も大切なことは、児童の活動意識を継続させていくことである。一つの活動が、次の活動を誘発したり、深まりを追及したりするなど、新たな活動へと広げていくには、活動の場の構成が重要となる。それらの、諸条件は地域に点在している。

地域素材を教材化するにあたっては、児童の生活圏である地域のどこにどのような素材があるのか、活用の時期はいつがいいのか等、教師自ら調査し、資料を収集し、十分に検討していく必要がある。



② 地域人材の活用

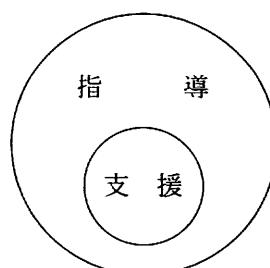
地域素材を教材化するうえで、地域人材の果たす役割は大きく、地域の素材を教材化するには、地域の人々を切り離すことはできない。地域素材を取り上げるには必ず、そこに「人材」が必要となってくる。そこで、地域素材と同じように、地域人材も学習活動へ積極的に活用すべきである。

(2) 支援の工夫

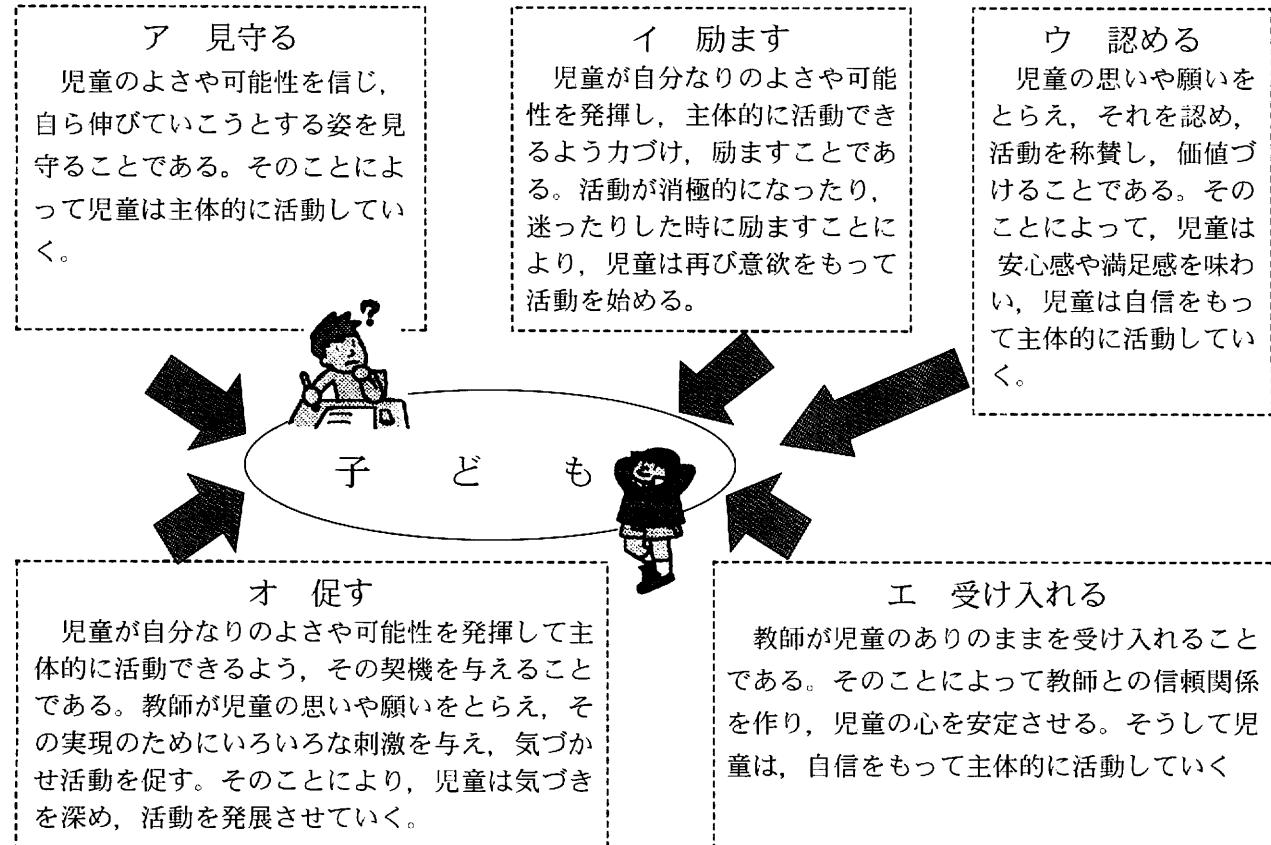
① 支援とは

「支援」とは支え助けることであり、「指導」の一つである。

主体的に学習する児童を育成するには支援することが重要になってくる。



② 支援の具体的な内容



(3) 単元構成や学習過程における支援の工夫

① 単元構成における支援の工夫

- ア グルーピングは児童の思いや願いがかなえられるように、自分の見たい物や探検したい場所を選択させ、活動の意欲を高めた。
- イ 活動は児童とじっくり話し合い、教師と一緒に作りだすようにし、活動の見通しを持たせるようにした。
- ウ 学習効果を高めるため、生活科だけではなく他教科との合科的・関連的指導を行った。
- エ 児童がじっくり活動できるように時間にゆとりをもって、単元を組むようにした。特に、「うみであそぼう」では、児童の興味・関心を引き出させるよう動機付けを図った。
- オ 海に関する話を聞いたり、繰り返し探検活動をする等、多様な体験活動を通して、児童は学習意欲が高まった。
- カ 探検活動では地域の人材を多く活用し、多様な体験活動ができるように工夫した。
- キ 父母の教育支援ボランティアの協力を得て、授業に参加することで、児童一人一人のよさを見取ったり、新たな発見をすることができた

② 学習過程における支援の工夫

- ア 児童の思いを表現できるようなワークシートを作成し、感想がかきやすいように配慮した。
- イ 探検場所がなかなか決められない児童には、地図やパンフレット等を見せて一緒に話し合って決めた。
- ウ 電話のかけ方を練習する場面では、おもちゃの電話を用意し、疑似体験させることにより、電話のかけ方がスムーズにできた。

- 工 探検場所を決める時に、地域のことを聞かせたり、教師が例を挙げたりして、多様な探検活動になるようにした。
- オ 教師が例を挙げる等、表現方法が多様になるように工夫した。
- カ 発表会では友達のよさに視点を当て、それに気づかせるような発問や称賛、場の設定をした。
- キ ポスターセッションでの発表会では、聞き手側の児童の数に偏りがないように配慮した。

IV 授業実践

1 単元名 「すてきな村をさがしたいな 一海たんけん一」

2 単元設定の理由

(1) 教材観

新学習指導要領の第1・2学年の目標の(1)では、自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物等とのかかわりに関心をもち、それらに愛着をもつことができるようになるとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動できるようにすることが求められている。

本村はほとんどの集落が海に面しており、近年、漁業従事者は減ってきてはいるものの、車えびやモズク、とこぶし等の養殖業をはじめ、パヤオからの水揚げもあり、せり市もさかんに行われている。また、地域行事の一つとして「海野のハーリー」や「三月浜下り」の行事等、海に関する行事が残っている地域もある。

このように、海に関する素材が豊富で、身近な人々や自然、公共物の利用と内容も幅広く、児童に多様な体験や活動を展開させるには、海を題材とした「海たんけん」は本校児童に適した教材であると考える。

今回は「三月浜下り」でウムニーを食べる習慣があるという教師の誘いかけをきっかけとして、学校近くの海岸で潮干狩りをすることから始まる。そこから、自分の住んでいる地域の人々や自然を利用した公共施設や伝統行事に目を向けさせたい。また、人々や公共施設を訪ねることで、地域自然の素晴らしさや人々の温かさに触れ、地域が好きになり、それらに進んでかかわらせたいと考える。

(2) 児童観

本学級の児童の多くは核家族で、帰宅後は一人で過ごしたり、兄弟や二、三人の友達と過ごす児童が全体の97%を占めている。また、知念村の海の施設や史跡を知っているかという問い合わせに対し、ほとんどの児童が知っている場所として観光施設を挙げた。

児童の多くは探検活動が好きである。1年生での学校探検で探検活動の楽しさを十分味わってはいるが、2年生になり校外での探検活動は今回が初めてで、「探検に行ってみたい。でも、ちゃんと帰ってこれるかな。」等、ドキドキ、ワクワクの探検活動を心待ちにしている子が多い。

(3) 指導観

児童に、意欲的に活動に取り組ませる手立てとして思いや願いが十分かなえられる生き物や探検場所を見つけさせ、活動の場が広がるようにさせたい。その際、十分な時間を確保し、自然や人々との触れ合いを通して、地域のよさに気づかせたい。また、ワークシートや日記、発表等を通して、自分のよさ、友達のよさにも気づかせたい。

そして、児童が身近な人々や地域の様々な場所、公共物等にかかわることを通して、地域に愛着をもたせ、集団や社会の一員としても自分の役割や行動について考えさせ、さらに、特活や道徳の時間において、場に応じた適切な行動や安全の指導を行いたい。

調べたことをまとめ、表現する段階では、多様な表現活動を通して、意欲的に発表できるようにさせたい。指導の効果を高めるため、他教科との合科的・関連的指導をし、学習過程全般において、個に応じた支援をすることで、身近な人々や自然に進んでかかわるような児童へ変容を図りたい。

3 活動の流れ

すてきな村をさがしたいな 一海たんけん一 (17時間)

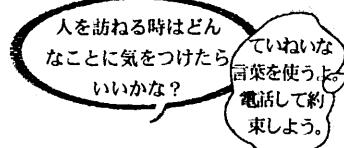
単元目標

- 地域の人々や自然とのかかわりを通して、自分の住む地域に親しみをもち、人々のよさに気づくことができる。また、人との接し方やマナーを身につけ、進んで活動できる。

活動名	単元構成や学習過程における支援の工夫
うみでみつけよう	<p>☆視点別のグループ分けをすることで、児童の思いや願いをかなえるようにする。</p>
うみであそぶけいかくをたてよう	<p>☆学年TTを組み、個への対応に柔軟に取り組めるようにする。</p>
うみであそぼう	<p>☆探検活動は教師と児童と一緒に作り出すようにする。</p> <p>◎探検のきまり、安全面の指導は十分に行なう。</p>
みんなにおしえよう	<p>☆海で遊ぶ時は、十分時間を確保してじっくりかかわらせるようにする。</p> <p>☆感想が思うように書けない児童には、海での様子を思い出させるように言葉かけをする。</p> <p>☆ワークシートは絵、文の両方かけるように配慮し、児童に選ばせるようにする。</p>
知念村のうみじまんをさがそう	<p>☆発表では調べたことを称賛し、次への活動につなげられるような言葉かけをする。</p>
6時間	<p>☆事前に探検ができそうな場所を調べておき、探検の趣旨も伝える。</p> <p>☆知念村の海自慢は何か、事前に家の人に聞かせるようにする。意見が出ないようであれば教師が提示する。</p>

- ★児童の思いや願いをかなえられるよう、探検場所によるグループ分けをする。
- ★探検場所が決まらない児童には、地図を見せたりして決めさせるようにする。

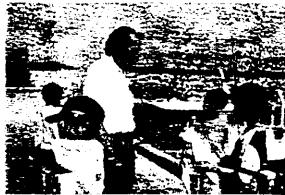
◆たんけんごっこをしよう（2時間）道徳1時間 TT



人を訪ねる時はどんなことに気をつけたらいいかな？
ていねいな言葉を使う。電話して約束しよう。

- ★場に応じた適切な行動や安全の指導を道徳の時間で取り上げ、指導の効果を高める。
- ★TTを組み、挨拶や電話のかけ方、インタビューの仕方等、細かな指導ができるようにする。

◆うみたんけんをしよう 2時間 学年TT



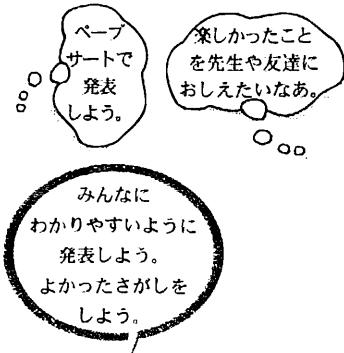
- ◎探検のきまり、安全面の指導を十分行うようにする。

- ★探検の時間は、十分に確保するようにする。
- ★学年TT、父母ボランティアと多人数での取り組みをし、個への対応に柔軟に取り組めるようにする。

◆絵や文であらわそう（国語1時間 国工1時間）

- ★指導の効果を高めるために、他教科との合科的な指導を取り上げるようにする。

◆はつびよう会のじゅんびをしよう（3時間） TT



- ★時間のかかる児童に対して、探検活動を想起させるような言葉かけをする。
- ★児童がじっくりと作り楽しむことができるよう準備の時間の確保は十分できるようにする。
- ★表現方法を多様にするために、教師が示したりして選ばせるようにする。
- ★TTを組み、多様な表現方法や発表の仕方、まとめ方等、柔軟に対応するようにする。

◆はつびよう会をしよう（2時間）

早く発表したいなあ。
地域の○○さんに教えてくれたお礼がいいたいなあ。



○○さんは、ハーリーについて、くわしいんだね。



- ★指導の効果を高めるため、国語科の「順序に気をつけて書く」と関連させて書かせるようにする。

- ★なかなか進まない児童には想起させながら書かせるようにする。

◆ちいきのひとにおれいの手紙をかこう（国語1時間）



- ★海と仲良くする方法を特活の安全指導と関連させ話し合わせるようにする。

- ◎海は楽しい所でもあるが、危険な一面も併せ持っていることを理解させ、海での安全指導を十分行う。

◆うみとなかよしよう（特活1時間）

海とずっとなかよくする方法をみんなで考えよう。
安全に気をつけて遊ばないといけないね。

海を汚さないようにしたいです。

危険な生き物もいるから図書館で調べてくわしくなりたいなあ。

子どもだけで、海に行ったらいけないね。

4 本時の活動

(1) 単元名 すてきな村をさがしたいな 一海たんけんー

(2) 本時の活動のねらい

- 探検したことを振り返り、海や地域の人とのかかわり合いを自分なりに表現することができる。
- 友達の発表を聞き、友達のよさに気づくことができる。

(3) 授業仮説

- ① 児童の思いや願いを生かした表現活動を取り入れれば、意欲的に発表できるであろう。
- ② 意欲的に活動に取り組む支援を行えば、自然の素晴らしさや地域の人々・友達のよさに気づくことができるであろう。

活動の流れ	教師の発問	児童の思いや願い	☆教師の支援
0分	めあてをたしかめよう	楽しく、わかりやすく、新しいことを発表しよう。よかつたさがしをしよう。	☆前もって書いてある個人のめあてを休み時間に読ませ、自分のめあてをもたせる。
5分	知念村のうみじまん大会をしよう ポスターセッションでの一斉発表（2回）	レジャーセンターグループ（大型絵本） グラスボートでの海の中の様子や鯨の話、太陽の砂の不思議を絵本で発表する。	☆ポスターセッション形式で、聞き手側の児童は聞きたいグループの発表が聞けるようにする。
60分	海野ハーリー・みなとグループ（クイズ） ・漁船の中の様子、消波ブロックの種類、海野ハーリーについて、魚について クイズ形式で発表する。	せりぐるーぐ（紙芝居、OHC） ・せりの最中での人々の様子や魚の種類、冷蔵庫の様子などを紙芝居や写真を使って発表する。	☆聞き手側の児童にはできるだけ多くの友達のよさが見つけられるように言葉かけをする。 ☆D君は書くことが苦手である。自分の思っていることを文章にすることができなかったが、教師が話を聞き、その気づきを称賛したので、グループでの活動ができるようになった。 ☆R君、Hさんは文字を書いたり、読んだりすることが苦手である。教師の言葉かけで自分なりの思いを文章にした。すらすら読めないので、教師・友達と一緒に練習した。 ☆YO君、YY君は自分の体験を教師と一緒に確かめながら文章化した。

活動の流れ	☆教師の支援
40分	よかつたさがしをしよう ・各グループの発表後、ワークシートに友達のよさを書き、発表する。
60分	レジャーセンターグループへの教師の称賛 ☆とてもチームワークがよく、発表準備段階でも協力し合い、まとめる時もみんなで相談して仲良く進めていた。また、絵本作りも分担しあって、みんなで仕上げていた。 ☆D君は聞き知っている知識と実際に探検で実物を目の当たりにして、自分の確かな知識となつた。（シャコガイの話） せりぐるーぐへの教師の称賛 ☆Hさんは、発表することをまとめる段階で、みんなが気づかなかつた（働く人の様子）に気づいたので発表内容にも幅が出た。 ☆Rさんは、写真を見せたほうが発表の内容もよく伝わるだろうという考えがあり、写真をOHCに写して発表した。魚の種類等、よくわかつた。 ☆Aさんは探検したことを絵にする時、最後までていねいに仕上げていた。 海野ハーリー・みなとグループへの教師の称賛 ☆Yさんは、漁船に乗った時のことを思い出して、文にしたので様子がよくわかつた。 ☆YO君はハーリー船を17日に海に下ろすという区長さんの話をよく覚えていて、見に行きたかったが、大人と一緒に海に行つてはいけないという約束を守りあきらめた。翌日、教師にお願いしてグループ全員でハーリー船を見に行つた。行きたいという好奇心に負けなかつた。
	☆本時の活動の様子をはっぴようはなまるカードに記入し、本時を振り返る。

5 考察

(1) 授業仮説①に対する考察

児童に意欲的に発表させる手立てとして、児童の思いや願いを生かした表現活動を取り入れた。その結果、児童は喜んで自分達の作品を作り、自信をもって発表できた。特に、せりぐるーぐは、他のグループにない良い発表がしたいと絵本と紙芝居を作った。また、発表会当日には自分達で写した探険時の写真を持ってきてOHCで写して発表した。発表での役割分担も自分達で話し合って決める等、主体的な態度が見られた。

(2) 授業仮説②に対する考察

児童に意欲的に活動させるため、今回は初めてポスターセッション形式での発表会に挑戦した。発表側の児童は、聞く側の児童との距離の短かさや人数が少ないと、同時に他の発表グループもいるという安心感、聞く側の視点も「よさがし」ということで、張り切って発表していた。聞く側の児童も質問しやすい、作品がよく見え、発表がよく聞こえることで、友達のよさを探そうと静かに聞いていた。初めてのことでのことで、内容的にやや深まりに欠けるものの、たくさんのかなえられた児童は、2回目の発表では発表する態度や内容等、大きく変容した。

V 研究全体の考察

児童は、自分の思いや願いがかなえられる活動をする時、満足感、成就感を味わい、それが主体的に学習する原動力になり、自信となることがわかった。今回は海たんけんを通して児童に変容が見られた。児童の思いや願いがかなえられるように地域の人々や自然に進んでかかわらせる活動を2回取り入れ、授業を実践した。A君は「うみであそぼう」の学習では、汚いからとなかなか海の生き物や砂に手を触ることができなかった。しかし、教師や他の児童の「一緒にやってみよう」の言葉かけには素直に応じて遊ぶようになった。潮干狩りの最後に「魚やクラゲが飲み込むと死んでしまう」とビニール等のゴミを拾い出した。教師がその行動を皆の前でほめ、他の児童も認めたことでA君の学習活動に変容が見られるようになった。2回目の「うみたんけんをしよう」では、せりグループとなり、漁協の職員に進んで挨拶をしたり質問したりと積極的な態度で活動できた。発表会では友達の力を借りながら発表したり、質問に答える場面も見られた。

学級全体における児童の意識調査を試みた。その結果、児童全員が自ら進んで、探検活動がしたいと願っていることがわかった。(表1) その理由として、「いろいろな体験活動ができるから」72%、

「調べるのが楽しい」が28%であった。また、「自分で電話して探検の約束ができる」と答えた児童は86%、「進んでインタビューできる」と答えた児童は90%であった。(表2) 児童の多くは、主体的に探検活動に参加したいと考えてはいるものの電話での応対やインタビュー等、人々とのかかわりは恥ずかしくて少し苦手だという意識をもっているようである。このことから、探検活動や地域の人々とかかわらせる活動を繰り返し行う必要があると考える。

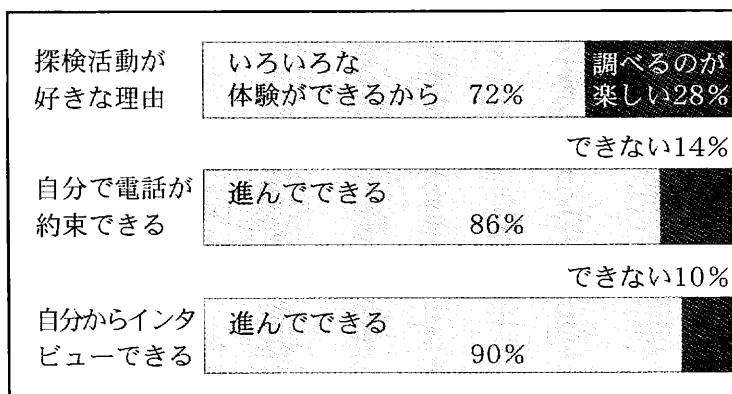
本単元を通して、児童は自分の周りに住んでいる人々や自然、公共施設に関心をもつようになった。「同じ団地に住んでいるおじさんが、せりで働いていて名前は〇〇さんっていうよ。」「発表会に運天さんも呼ばれてよかったのに。」「漁協の大城さんに感謝しているよ。」等、様々なつなづやきが聞こえた。地域の人々とのかかわりは探検の時、発表会の準備、表現活動において児童の心の中でさらに深まつたことがわかった。

また、「知念村が好き」という児童は97%で、何気なく会っていた近所のおじさんの仕事ぶりや話をする中で互いに理解できること、知っているつもりだった地域の自然や公共施設について新たな発見をした

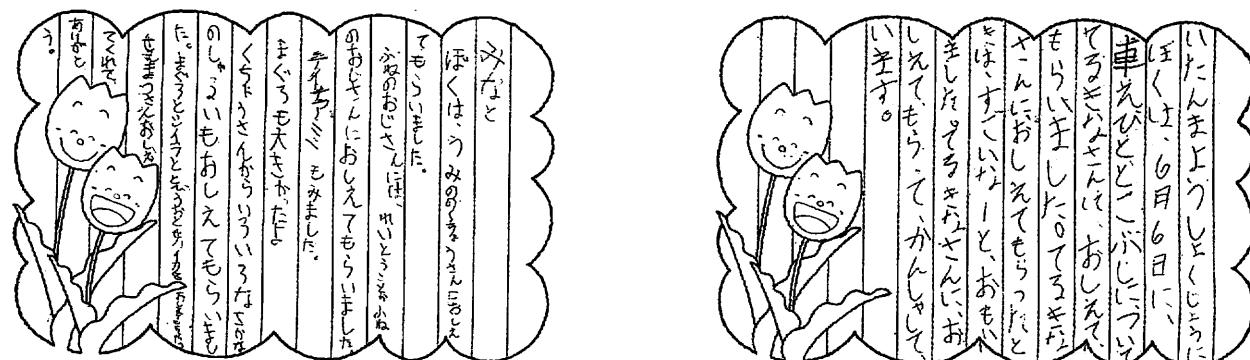
表1 授業前と授業後の児童の意識調査（調査人数30人）

質問事項	授業前 (%)	授業後 (%)
探検したい	90	100
知念村が好き	83	97

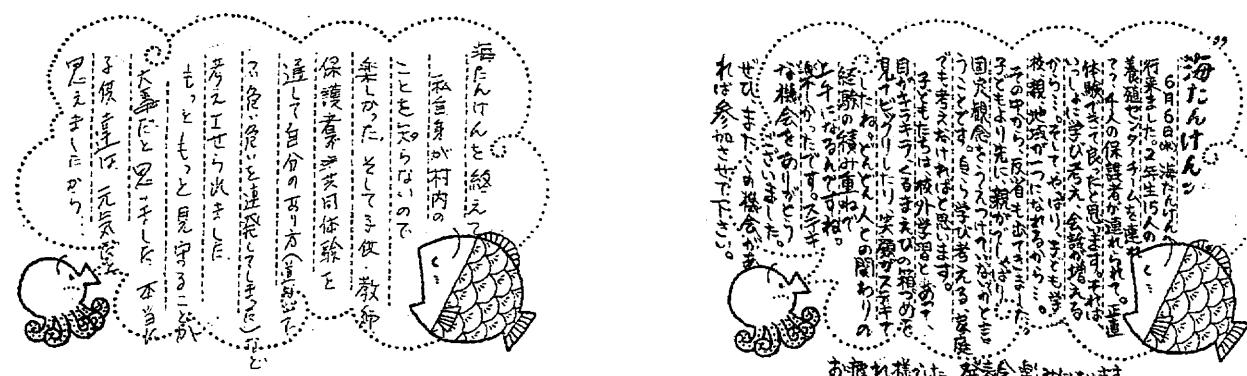
表2 児童の意識調査（授業終了後）



ことで「次は、森探検とか人探険に行こう。」という新たな探検活動を実施したいという積極的な発言も聞かれた。このことから、自分の住んでいる地域に愛着をもち、もっと調べてみたいという児童が増えたことがわかった。(表1)



資料1 児童から地域の人への感謝の手紙



資料2 探検を終えての父母からの手紙

VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

「海たんけん」を通して「身近な人々や自然に進んでかかわる学習指導の工夫」をテーマに学校だけでなく、地域の人々の協力を得て、本研究を進めてきた。

実践を終えて、成果として次のようなことがあげられる。

- (1) 児童の多くは、意欲的に活動できるようになってきた。
- (2) 地域の人々や自然に対して関心をもつ児童が増えた。
- (3) 友達のよさや自分のよさを認めようとする児童が増えた。
- (4) 学習活動へ父母が積極的に参加し、協力的であった。

2 今後の課題

- (1) 地域素材の教材化と単元への位置付け
- (2) 2年間を見通した年間指導計画の作成
- (3) 生活科マップ、生活科暦の作成

＜主な参考文献＞

全国小学校生活科教育研究協議会編 中野重人他2名編 佐々木秀樹	『生活科授業実践10のポイント』 『生活科事典』 『生活科教室』No.24	東洋出版社 東京書籍 日本文教出版株式会社	1994年 1996年 2001年
---------------------------------------	---	-----------------------------	-------------------------